2020 年 2 月- 3 月合併号　　題字　一萬田 尚登 第 5 代日印協会会長

月刊インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会（日印間の政治・経済・文化・人的交流に貢献して 117 年）

タミルナードゥ州マドゥライの
ミーナークシー・アンマン寺院

ミーナークシー女神（パールヴァティ）とその夫であるスンダレーシュワラ神（シヴァ）を主神とした南インド、ドラヴィダ様式最大のヒンドゥー寺院。
マドゥライへはチェンナイから飛行機で 1 時間強。

（写真 Wikipedia）

目次

1. 第 71 回インド共和国記念日への森会長祝辞発出 …… P. 3
2. 西葛西インド人コミュニティの成り立ち …… P. 4
（英語原文） …… P. 6
3. Incredible India – 3 人のインド人女性 …… P. 8
4. インド教育事情 …… P. 11
5. インドニュース（2020 年 1 月） …… P. 14
6. イベント紹介 …… P. 16
7. 新刊書紹介 …… P. 17
8. 掲示板 …… P. 18

ページ番号を合わせるため空白ページを入れております。

1. 第 71 回インド共和国記念日への森会長祝辞発出

A Congratulatory Message from H.E. Mr. Mori, Chairman of JIA for 71st Republic Day of India

日印協会　常務理事　笹田勝義

2020 年 1 月 26 日は、インドにおいて第 71 回目インド共和国記念日に当る。恒例ではあるが、日印協会の森喜朗会長より、祝辞を発出し、Japan News 及び Japan Times の英字新聞 2 紙に掲載された。祝辞内容は下記の通りである。

Japan-India ties developing smoothly

By Yoshiro Mori
Chairman of the Japan-India Association

On the occasion of the 70th Republic Day of India, I would like to extend my heartfelt congratulations to the government and people of India on behalf of the Japan-India Association.

Yoshiro Mori

The new year 2020 has started with geopolitical and geoeconomic uncertainties, such as Iran-U.S. relations, the nuclear issue of North Korea and trade conflicts among major countries. Although the Modi government has been strengthened following India's general elections last spring, and the Abe administration has been consolidated with Prime Minister Shinzo Abe becoming the longest-serving prime minister in Japan's history, both are confronted with difficult domestic and international issues.

However, it is gratifying that Japan-India relations are smoothly developing with the implementation of the Special Strategic and Global Partnership between the two countries. Japan's "free and open Indo-Pacific vision" and India's "Act East" policy are spreading from the Pacific Ocean to Africa throughout the Indian Ocean, engaging many like-minded countries in the region.

On the bilateral front, the two countries are promoting not only Japanese assistance in conventional avenues such as many projects in poverty alleviation, environmental protection, infrastructure for electricity, railways, roads, water projects, etc., but also cooperation to build industrial corridors between India's metropolitan cities, a Shinkansen line between Mumbai and Ahmedabad and connectivity building in Northeast India.

It is my belief that our relationship is blessed with a bright future for the benefit of our two peoples and our friends in and out of our regions.

In 2020, the Japan-India Association proudly marks the 117th year since its foundation. We are determined to fulfill our mission to serve our two nations, and pray for the prosperity of both countries and friendly developments for our peoples.

第７1 回インド共和国記念日に際しての日印協会森喜朗会長挨拶（仮訳）

第71回インド共和国記念日に際し、日印協会を代表してインド政府及び国民に対し祝意を表したいと思います。

2020 年は米イラン対立や北朝鮮の核問題、さらには主要国家間の貿易摩擦など地政学的及び地経学的な不確実性とともに幕開けしました。モディ政府は昨年のインド総選挙によって強化され、安倍内閣も安倍総理が我国の歴代第 1 位となる任期を達成しましたが、両国とも内政および外交面で困難を抱えています。

しかし、日印関係が「特別戦略的グローバル・パートナーシップ」を実践しつつ、スムーズに発展していることは喜ばしい限りです。日本の「自由で開かれたインド太平洋戦略」ヴィジョンとインドの「アクト・イースト」政策は、太平洋からインド洋を経てアフリカに至るまで、志を同じくする多くの国々を引き込みながら拡大しております。

二国間関係においては、両国は、貧困緩和、環境保護、電力・鉄道・道路・上下水道等のインフラ建設などの伝統的援助分野のみならず、インドの主要都市間の産業大動脈建設、ムンバイとアーメダバード間の新幹線プロジェクト、東北インドにおける連結性改善のための諸プロジェクトなどで協力を進めております。

私は、日印関係は、両国民およびこの地域の友人たちのためになるような明るい未来を持っていると確信いたします。

日印協会は 2020 年で創設以来 117 年目を迎えましたが、今後も両国のために貢献するよう使命を果たしてまいる決意で、両国の繁栄と国民の友好発展をお祈りいたします。

これを記念して1月24日に駐日インド大使館が、ホテルオークラにて記念祭を開催した。日印協会もインド大使館からご招待を受け、参加した。

Sanjay Kumar Verma駐日インド大使ご夫妻と大使館要人が会場入り口にて出迎えてくれ、祝辞を申し上げてから入場した。参加者は、ざっと400名程と思われ、駐日インド大使館員はもとより祝辞に訪れた各国大使館員は、お国の服装にて臨み、駐在武官は儀典用制服で参列されていた。また、インドの淑女たちは、色鮮やかなサリーをまとい、インドの衣装文化を十分に披露され見ていても飽きない程であった。

式典開始には、写真の如く、Verma大使や来賓の日印友好議員連盟細田会長の挨拶があり、共和国記念日の趣旨や二国間の友好の絆が披露された。その後、伝統あるインド舞踊が艶やかに舞い演じられた。

2. 西葛西インド人コミュニティの成り立ち

Formation of Indian Community in Nishi Kasai

「江戸川インド人会」会長　ジャパン・ビジネス・サービス
ジャグモハン・S・チャンドラニ
Jagmohan S. Chandrani, Chairman, Indian Community of Edogawa
President, Japan Business Services, Ltd.

ナマステ！（インドからのご挨拶）。

バスが西葛西三丁目バス停に近づくと、西葛西から新小岩へ、または新小岩から西葛西へ向かう都営バスでこの挨拶が聞こえます。西葛西は東京都江戸川区の地域の名前です。西葛西の珍しい特徴の一つは、インド人にとってセンターとなったことです。

東京ディワリフェスタ西葛西での筆者

西葛西地区に住むインド人のほとんどは、日本でIT関連の仕事をしています。 1997-1998年頃以前は、西葛西に住んでいるインド人はほとんどいませんでした。かなりの数のインド人が日本に来た理由は、「ミレニアム・バグ」、「Y2K問題」、または「2000年問題」と呼ばれる古いコンピューターシステムの問題（年の桁が二けたしかなかった！）を解決するためのシステム修正のサポートに従事するためです。日本企業はエンジニアにこのソフトウェアの問題に対処してもらう必要があり、多くの日本企業はインドのIT企業と提携していました。インドのIT企業は、クライアントサイトで働くためにインド人エンジニアを日本に派遣しました。

これらのエンジニアはホテルに滞在し、職場や滞在場所の近くのレストランで食事をするように案内されました。ただし、これは多くのITエンジニアにとって困難な状況を生み出しました。これらの技術者は、動物性製品を一切含まない植物ベースの食品の食事要件を満たすことができるレストランを見つけることが難しかったのです。言い換えれば、かなりの数のインドのITエンジニアが「ベジタリアン」だったのです。

問題は、東京のそのエリアのほとんどすべてのレストランでベジタリアン用メニューが無かったのです。

そのため、食事のニーズが満たされなかったエンジニア達は、キッチン設備を備えた賃貸アパートを見つけ、食事の要件に従って自分で食事を準備することにしました。

それで、エンジニア達は賃貸アパートを探し始めました。その際、西葛西の自分を含めた長年この地域に住むインド人居住者は，この地域で適切なITエンジニアたちの住宅を見つけるのを支援しました。

しかし、エンジニア達はほとんど全員男性であり、家族なしで来ていました。彼らが準備できる食べ物は非常に限られていました。この問題を克服するために、西葛西に食事ができる施設「食堂」（mess hall）を作りました。そこに行けば、エンジニア達は毎日夕食を食べることができました。食事内容は、ベジタリアンが従う食事規則に従って、インド人シェフによって調理されました。この施設の情報を得た、より多くのエンジニアが西葛西エリアに宿泊施設を見つけ、移転することにしたのです。

東京ディワリフェスタ西葛西の様子

これが社会的相互作用につながり、インドのお祭りを祝う必要性が感じられるようになりました。そこで、西葛西の長年のインド人居住者とインドからの新しい住民が一緒になって、西葛西の公民館でディワリ祭を開催することになりました。インド人居住者による舞台公演があり、インド料理が来訪したすべての人々に提供されました。誰もがこのイベントを楽しみましたので、毎年このプログラムを開催することが決定されました。それから20年以上が経過し、今では毎年、江戸川区役所、インド大使館、そして最も重要なことに西葛西および近隣地域の日本人の支援を受けて、東京西葛西ディワリ祭が西葛西で開催されています。前述のように、当初、このイベントはホールで開催されていましたが、現在はオープンパークで開催されています。

2000年の到来とともに、インド人居住者の家族が日本に滞在し始めました。西葛西は滞在する人々のニーズにより変化していきました。インド女性たちの到着に伴い、インドの食料品やインドのテレビ番組などの毎日のエンターテイメントが必要になりました。インド食料品店は、西葛西にある食堂と同じ建物内に設立されました。これにより、西葛西地区のインド人女性は、毎日の食料品を自宅の近くで手に入れることができるようになったのです。それにより、食堂の必要性は減りました。ですが、西葛西の日本人居住者の支援で、その食堂はインド料理レストランになりました。現在、西葛西には、インドの食料品を販売する店が数多くあります。また、西葛西のインド料理店の数は、北インド、南インド料理、屋台の食べ物を提供する数で10以上に増加しました。

インドの女性が日本での滞在を楽しめるようにするには、インドで楽しんだのと同じエンターテイメントを提供することが必要です。日本で衛星通信（Satellite transponders）から番組にアクセスするには、インドのさまざまなテレビ放送局との取り決めが必要でした。インドのテレビ番組は、各州の言語で放送されています。

日本でインド人家庭でのインドのテレビ番組の必要性を満たすために、多言語のテレビ番組を提供する必要がありました。テレビ会社との交渉のために何度もインドを訪問した後、日本でさまざまなインドの言語でインドのテレビ番組をストリーミングする設備が現実のものとなりました。現在、日本でも35以上のインドのテレビ番組を視聴できます。

東京ディワリフェスタ西葛西に
参加した子供たち

さらに家族には子供達もいました。当然、子どもたちの教育施設が必要になりました。ほとんどの親は日本でプロジェクトベースで働いていたので、プロジェクトが完了したらインドに戻る必要があり、子供たちは一緒に日本からインドに移る必要があることは明らかでした。したがって、日本で提供される教育は、子どもたちが帰国時にインドの教育システムに参加できるようなものでなければなりませんでした。インドでの教育経験があり、長期居住者であったコミュニティの数人のインド人女性の助けで、西葛西に「タイニートッツ」（ちびっこ）という名前の施設が開始さ

れました。この施設は、当時の西葛西の子どもたちのほとんどに対応する、2 歳から 6 歳の子どもたち用でした。子供の数が増えるにつれて、より多くの学校がより年齢の高い子供たちに教育を提供するようになりました。今日、このいくつかの学校は非常に大きくなり、1 つの学校に 1000 人以上の生徒がいる学校もあります。

西葛西のインド人コミュニティは現在も成長しており、今後も多くのニーズを満たす必要があります。日本人住民の協力と理解により、インド人コミュニティは日本での実り多い滞在を楽しみにしています。

（英語原文）

Namaste - The greeting from India.

You will hear this greeting announced in the Toei Bus going from Nishi Kasai to Shin Koiwa or from Shin Koiwa to Nishi Kasai, when the bus is approaching the Nishi Kasai 3-chome bus stop.

西葛西にあるチャンドラニさんのお店

Nishi Kasai is the name of a locality in the Edogawa Ward of Tokyo. One of the unusual features of Nishi Kasai is that it has developed into a centre for Indian people.

Most of the Indians living in Nishi Kasai area are in IT related activity in Japan. Before 1997-98 there were very few Indians living in Nishi Kasai. The major reason for Indians coming to Japan in substantial numbers was related to support to rectify what is called the “Millennium Bug", "Y2K problem" or "Ni sen nen mondai". The Japanese companies needed to get engineers to tackle this software problem and many of the Japanese companies tied up with Indian IT companies. The Indian IT companies sent their engineers to Japan to work at client site. These engineers were staying in hotels and were guided to have their meals at the restaurants in the vicinity of their place of work or stay. However, this method created a difficult situation for a number of IT engineers. These engineers began to face difficulty in finding restaurants which could meet their dietary requirements of plant based foods which did not contain any animal products. In other words a substantial number of the Indian IT engineers were following the "vegetarian" diet.

The difficulty arose because all most all restaurants in that area of Tokyo did not have such items on their menu.

Considering the above it was decided that engineers whose dietary needs were not being met could find apartments on rent with kitchen facilities and prepare their own meals as per their dietary requirements.

So the engineers began their search for rented apartments. In this search they were helped by long time Indian residents of Nishi Kasai to find suitable housing in this locality.

However, as the engineers were all most all men and had come without family. It was found that the food they could prepare was very limited. In order to overcome this, a "mess hall" type of arrangement was created at Nishi Kasai, where the engineers could come and have their evening meals daily. The meals were cooked by Indian chefs as per the dietary rules followed by the vegetarians. The information of this facility got more engineers to consider to find accommodation and relocate to Nishi Kasai area.

This led to social interaction and a need was felt to celebrate Indian festivals. Here again the long time Indian residents of Nishi Kasai together with the new arrivals put together and did a Diwali Festival in Nishi Kasai at a community hall. There were stage performances by the resident Indians and Indian food was catered to all who had come. Everyone enjoyed the event and it was decided that efforts be made to hold

this program every year. It is more than twenty years since then and every year the Tokyo Nishi Kasai Diwali event has been organized at Nishi Kasai with the support of the City Office of Edogawa, the Embassy of India and most importantly the Japanese residents of Nishi Kasai and neighbouring areas. As mentioned, in the beginning the event was held in a hall, however, now it is held in an open park.

With the advent of the year 2000 the family members of Indian residents began coming to Japan to stay. This changed the needs of those staying in Nishi Kasai. With the arrival of the ladies the need for Indian grocery and daily entertainment like Indian TV programs. The grocery shop was established in Nishi Kasai in the same building where the mess hall was located. This provided the Indian ladies in the Nishi Kasai area to get their daily groceries near their homes. Of course the need for the mess hall got reduced. However, with the support of the Japanese residents of Nishi Kasai, the mess hall could become an Indian restaurant. Now there a number of such shops in Nishi Kasai, which sell Indian groceries. Also the number of Indian restaurants in Nishi Kasai increased to more than ten in number providing north India, south Indian and street food.

To help the ladies to make enjoyable their stay in Japan, it became necessary that the same entertainment as they enjoyed in India be provided. Arrangements had to be made with different TV broadcasters in India to access in Japan their programs from their satellite transponders. TV programs in India are broadcast in the language of each state.

To meet the needs for Indian TV programs in the homes of Indians in Japan, multi-language TV programs had to be provided. After a number of visits to India for negotiations with the TV companies the facility to stream Indian TV programs in different Indian languages in Japan became a reality. Today more than thirty-five Indian TV programs can be viewed in Japan.

Further families meant children. Naturally the need for facilities for education of the children became necessary. As most of the parents were working on projects in Japan, it was clear that they would need to return to India on completion of their project and the children would need to move out of Japan to India with them. Hence, the education provided in Japan had to be such that it would be possible for the children to join the education system in India on their return. With the help of some of the Indian ladies in the community who had teaching experience in India and long term residents, a facility named Tiny Tots was started in Nishi Kasai. This catered to children from the age of two years to six years, as most of the children in Nishi Kasai then were of this age group. As the number of children increased more schools came into being providing education for higher age children also. Today some of the schools have grown quite big, having more than one thousand students in one school.

The Indian community in Nishi Kasai is growing and there are many needs which have to be met. With the cooperation and understanding of the Japanese residents the Indian community looks forward to having a fruitful stay in Japan.

3. Incredible India－３人のインド人女性

Three Incredible Women in India

立教大学法学部教授　竹中千春（日印協会理事）

大学で国際政治の授業を担当しつつインドの政治や歴史を研究して、はや40年以上になるが、未だに「インド学」をマスターしたとは言い難い。インドはあまりにも奥深く、多様で、長い歴史を誇る国だからだ。そして、古に伝えられた仏教の言葉は多くの人々の魂を潤してきたに違いないが、「開眼」という語は私とインドの関係を捉えている。ダイナミックに変貌しつつ永遠の悠久さを備えたインドとそこに暮らす人々は、私の狭い常識を揺さぶり、新鮮な世界観に開眼させ続けている。以下では、そうしたインドへの感謝を込めて、私の人生に衝撃を与えてくれた3人のインド人女性との出会いを綴ってみたいと思う。

1.　女盗賊プーラン・デーヴィーとの出会い

2010年に有志舎から刊行してもらった『盗賊のインド史―帝国・国家・無法者』は、過分な評価をいただき大平正芳記念賞を受けたが、本書の真の主人公は女盗賊プーラン・デーヴィー（Phoolan Devi）であった。きっかけは、インド政府留学生としてデリー大学に留学した1980-81年に遡る。ジャナタ政権が下野し、インド国民会議派のインディラ・ガンディーが政権を復活した頃だ。「プーラン逃亡」「盗賊団と警察隊の衝突」という見出しが、日々の新聞を飾り、「盗賊」を指す「ダコイト（dacoit）」の語や盗賊の跋扈する現実に、心底驚いた。

ニューデリーのプーラン・デーヴィーの議員宿舎。
2001年2月（竹中撮影）

彼女は1983年にマディヤ・プラデーシュ（MP）州で警察に投降し、グワリオール刑務所に収監された。彼女によれば、強力な女性首相インディラ・ガンディーと直に談判したというが、投降の舞台には「盗賊の女王」を一目見ようと大勢の人々が集まった。日本でもプーランについての訳書や本が出されたが、1996年には彼女が国会議員に転じて世を驚かせた。ウッタル・プラデーシュ（UP）州政権を握る社会党党首ムラヤムシン・ヤーダブが彼女を釈放し、総選挙で候補者に擁立したのである。同州ではインド人民党、社会党、大衆社会党が、地主や商人などの座を占めてきた上層カーストの人々、「他の後進諸階級（OBC）」と呼ばれる農民層、差別されてきたダリットの支持基盤を土台に激しく争っていた。プーランはヴァラーナシに近いミルザプール選挙区で、強力な社会党候補として他党を破ったのである。

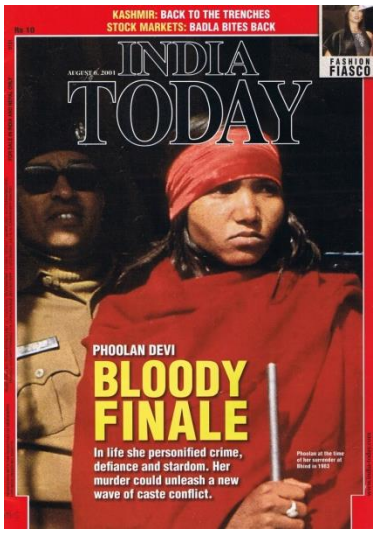
私がプーラン・デーヴィーに会ったのは2000年2月である。1996-98年ジャナタ系の連合政権下で与党議員を務めた後、1998年総選挙では落選し、翌年の総選挙で返り咲いていた。日本経済新聞のデリー支局に務めていたインド人女性が、プーランとの約束を取り付けてくれた。面会当日、プーランは場所と時間を何度も変更し、夜10時頃ようやくニューデリーの彼女の家で面会を許してくれた。人民党政権は護衛を付けてくれないとこぼしつつ、アラファト議長さながらに刻々と居場所を変えていたのである。

プーランの村の家の前でお母さん、甥御さん、姪御さん。
2001年3月（同左）

翌年2月には彼女の議員事務所で再会した。党のお目付け役がいたが、国際女性デーにはアッサムで講演してくれと依頼する女性教授や、夫のDVから逃げてきたというビハール出身の女性がいて、なかなか興味深かった。数日後、プーランの勧めで彼女の故郷に向かった。工業都市カンプールからデコボコ道を車で6時間ほど行った、ジャムナ川沿いの村にある質素な泥の家で、しっかり者のお母さんと学校の制服を着た元気な甥と姪に会った。彼女を主人公にした映画にも出てきた「盗賊地帯」の風景に奇妙な感動を覚えながらデリーに戻ったが、最新号の *India Today* には、前年にこの地域で数千人の人々が

身代金のために誘拐され、殺された人も多いという記事が掲載されていて、肝を冷やした記憶がある。

プーランの人生は波乱万丈だ。生年は定かではなく、11 歳ころ嫁入りし、夫の迫害に逃げ出し、盗賊団に拉致された。夫とプーランの叔父の仕業だとされる。盗賊団の首領はプーランを無理やり愛人にしたが、恋仲になった同じ盗賊団の若者と逃げたプーランは、自らの盗賊団を結成する。自分を虐めた人々の村を襲って、20 名以上を殺害する強盗の容疑で警察に追われ、数年後に投降した。しかし、出会った彼女は私とほぼ同年代で、率直で賢く明るい女性。学校には通ったことがなく読み書きはできないが、デリー大学で学ぶ青年を養子にしていた。教育は大事だ、女性は強くなるべきだ。差別はいけない、村に工場を立てて農民を雇うべきだ。核兵器は正しい、私も男ならカシミールで戦うなどと語る。矛盾に満ちながら、パワフルな女性だった。



2001 年 7 月プーラン・デーヴィー
暗殺直後の India Today の表紙

イギリスの歴史家ホブズボームは、近代国家が形成され市場経済が浸透する変動期に「社会的盗賊」が民衆英雄として登場すると論じた。地元の権力者である地主や金貸しに報復し、国家権力と戦い、貧しい人々に金品を分け与える。ドゥルガー女神やカーリー女神のように、正義の鉄槌を下す女盗賊プーラン。だが、政府や富裕な人々にとっては、極悪非道の犯罪者だ。私の出会った 4 か月後、彼女はデリーの議員宿舎前で凶弾に倒れた。

プーランは日本人を尊敬していたと思う。その理由は、議員時代に京都精華大学などに招かれた経験があったからである。自分が平等に尊敬をもって歓待された仏教国こそが、日本だった。だからこそ、私にも会ってくれたのだろう。アンベートカルの教えに従って仏教徒になったと彼女は力説し、シッキム産のお茶と仏の座像を贈ってくれた。今も大学の研究室に置いたこの像を見るたびに、彼女の笑顔を思い出す。

2. 女性の自立と助け合いをめざし、NGO ヴァナンガナを設立したマダヴィ・ククレジャ

ダムの開所式のマダヴィ・
ククレジャさん。2006 年 9 月
（竹中撮影）

二人目は、UP 州南部のチトラクット県で女性 NGO のヴァナンガナ（Vanangana）を設立したマダヴィ・ククレジャ（Madhavi Kuckreja）さんだ。彼女も豪傑だ。「一食基金」を運営する庭野平和財団の南アジア・プログラムと担当のプロジェクト・オフィサーだった中村唯さんのご縁で、彼女に会えた。2006 年 9 月同財団の助成を受けて治水のためのダムを建設したヴァナンガナの視察に出かけたからである。

マダヴィさん自身はデリーの豊かな家庭に育ち、カナダに留学した後、1990 年代初めから政府の農村女性識字教育プログラムのためにチトラクット県に派遣された。水の乏しい、生産力の低い農村地帯で、地主が貧しい農民や先住民を支配してきた土地柄。ヒンドゥー至上主義勢力も根城を築き、隣の MP 州に続くブンデルカンドは盗賊地帯として有名で、プーランの故郷とよく似ている。

ヴァナンガナがまず手掛けたのは「マイクロクレジット」である。バングラデシュのグラミン銀行で有名だが、インドでもグジャラート州の SEWA などが 1970 年代より実践してきた。約 15 名の女性たちが村銀行を開設し、共同で資金を管理する。積み立てや長期ローンで女性の経済能力を担保し、職業訓練、識字教育、保健衛生教育を行う。経済的なエンパワーメントのしくみだ。しかしヴァナンガナには新しい挑戦が起こった。家から逃げた妻と娘が夫であり父である男性から迫害される事件が持ち込まれたのである。しかもヒンドゥー至上主義団体が介入し、ヴァナン

ヴァナンガナとマダヴィさんも加わり、UP 州の女性 NGO が
女性の権利と民主主義を訴えている。
2014 年 5 月総選挙中のヴァナーラシで（同上）

ガナやマダヴィさんも脅かされた。こうして1990年代後半には「女性に対する暴力」と「アドヴォカシー（権利主張）」が重要な課題となった。

伝統的な社会であり、政治や社会の圧力が掛けられても、インドの人々は諦めない。NGOもメディアも専門家も裁判も選挙も使って、権利を主張して生き延びようとする。救いを求めてヴァナンガナに辿り着いた女性たちは、先輩の経験や知識に学び、自らの問題を乗り越え、仲間に手を差し伸べる者に成長し、クリエイティヴな「自助（セルフヘルプ）」の花を咲かせてきた。だからこそ、貧しさを生む水不足に挑み、日本の支援を引き出してダム建設を実現するまでのNGOとなっていた。リーダーのマダヴィさんはすごい人だ。そして、少し前には不運に泣いていたのに立ち上がった女性たちもすごい。アマルティア・センの「人間開発」理論を具現したような、現代インドの奇跡を目の当たりにしたと思う。

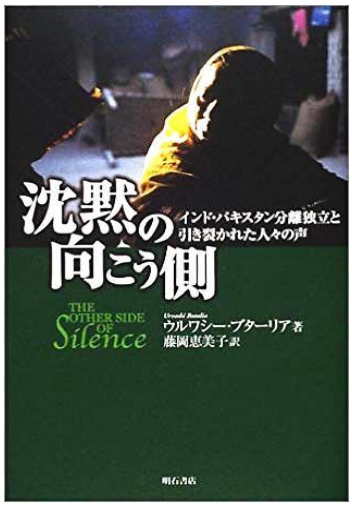
3. フェミニスト出版社を築き、女性の歴史を書くウルヴァシ・ブタリア

最後は、ウルヴァシ・ブタリア（Urvashi Butalia）さんである。初めて会ったのは、私が国際文化会館のフェローシップでデリーに滞在した1989年。新しい歴史研究の脚光を浴びたサバルタン・スタディーズの先駆者ギャーネンドラ・パンデーさんの紹介だった。彼女のオフィスで先駆的なフェミニスト出版社として1983年に設立された「女性のためのカーリー女神（Kali for Women）」を訪ねた。ちょうど電話中だった彼女は、受話器を置いた途端、”Hi! Are you Chiharu?”と元気な声を掛けてくれた。分離独立についてのドイツからの電話だったらしい。この瞬間、ウルヴァシさんが大好きになった。

“THE INQUISITIVE FEMINIST: URVASHI BUTALIA”,
Kindle, February 2, 2017.
http://kindlemag.in/inquisitive-feminist-urvashi-butalia/

長年の調査を基礎に綴った彼女の *The Other Side of Silence: Voices from the Partition of India* (Penguin, India, 1998)は、インドとパキスタンにとっての歴史問題ともいうべき分離独立についての画期的な歴史書として、国内外で大反響を呼んだ。多くの言語に翻訳され、日本では藤岡恵美子さんの翻訳で『沈黙の向こう側』（明石書店、2002年）が刊行された。フランスの芸術文化勲章、日経アジア賞などを数々の賞を受賞し、2011年国民名誉賞のパドマ・シュリー賞がインド大統領から授与された。

『沈黙の向こう側』は、ウルヴァシさんの家族の物語でもある。彼女の母親は分離独立のとき自分の母親とラホールからデリーに移り住んだが、彼女の弟、つまりウルヴァシさんの叔父はイスラームに改宗して故郷を離れなかった。何十年もの別離の後、ウルヴァシさんは国境を越え、ついに叔父に出会う。本書はこの逸話から始まるが、国家の激動の歴史に巻き込まれ、家や畑を失い、家族と別離し、残酷な暴力を被った人々、なかでも女性たちの運命に目を広げていく。オーラル・ヒストリーという手法の先駆けでもあった。



藤岡恵美子さんの翻訳
『沈黙の向こう側』
（明石書店、2002年）

ウルヴァシさん自身が、ジェンダー研究や女性運動の歩みとともに生きてきた。彼女がデリー大学やロンドン大学で学んだころ、新しい動きが始まっていた。第一に、1975年の「国際女性年」と世界女性会議を契機に世界で女性差別撤廃条約への関心が高まり、インドのインディラ・ガンディー首相も新しい政策を手掛けた。第二に、皮肉にもそのインディラの独裁政治が批判され、民主化を求めるジャナタ運動が広がり、女性運動や女性NGOが活発化した。盗賊の世界ではプーランが台頭して後に議員になり、マダヴィさんがソーシャル・ワーカーとして女性NGOを立ち上げたのも、こうした歴史の流れの中で理解できる。

ウルヴァシさんは「女性のためのカーリー女神」を継ぐ「ズバーン(Zubaan)」社を運営し、女性の歴史・活動・思想に関わる多くの書物を出版し続けているが、同時に多くの女性NGOと連

携して活動する。毎年、色鮮やかなNGOのポスターや女性リーダーのプロフィールを集めて展覧会や写真集を発信している。緊張の絶えないカシミールで苦闘する女性たちの声を集めた書籍を発行し、笹川平和財団の支援も得て内戦を経たアッサム州や東北地域の女性NGOと連携したプロジェクトも行う。彼女は日本とも縁が深い。南アジアへの支援を送るNGOシャプラニールにいた大橋正明さんや国際交流基金のデリー支局長を務めた小川忠さんとも親しく、国際交流基金・国際文化会館主催のアジア・リーダーシップ・フェロー・プログラムの2000年フェローとして来日した。私自身も、ウルヴァシさんと共にに数々の国際交流の企画を実施させてもらった。

以上のように書くと本当に偉すぎる人だが、私にはあくまでも頼りになる姉御であり、家族の親しい友だ。下の娘は、幼い頃にウルヴァシさんに日本語の「あいうえお」を教えたことが自慢だ。数年前、多忙な仕事を終えた後のウルヴァシさんを夫と共に鎌倉の東慶寺に案内した。江戸時代に多くの女性を救った駆け込み寺を一緒に歩いたことは、大事な思い出だ。かつての仏教がそうであったように、ウルヴァシさんは日本とインドの懸け橋として、さらにグローバルな知識人として、絶え間なく知恵と勇気を与え続けてくれている。私の周囲の若手研究者や学生たちも、貴重な教えを学んできた。ありがたいことだと思う。

以上、私にとっての大事な人々の話を綴ってきた。このように、日印友好の土台には数えきれない人々の交流の物語があるのだろう。先達への感謝を込めつつ、筆を置きたい。

4. インド教育事情

About India Education

サン・アンド・サンズ　インフォ
代表取締役社長　ウルハス・アチャリア　個人会員
CEO & Director, Sun and Sands Info
Ulhas Acharya

インド人口は１３億人強で、まだまだ増加しており、インドの国内外で貴重な人材供給源になってきています。その一部の高度人材はインド・米国・EUの企業のトップ座を占めています。その人材の一部は日本にも向き始め、留学や就職で来日しています。私は1992年に日本の文部省の奨学金で慶應義塾大学に留学しましたが、約30年前の当時、日本への留学生は殆どいませんでした。住んでいた祖師谷留学生会館でもインド人は片手で数えるくらいでした。現在は、留学促進活動や日系IT企業にて海外人材の採用が始まり、インドからも優秀な人材が日系企業に入社するようになりつつあります。しかし、日系企業に入社する高度人材のインド人は毎年100名強にすぎません。インド人留学生は数年前までは３桁でしたが、2018年からはやっと４桁前半になりました。

これからの日印関係において、その政治的･経済的成長のために人材交流は欠かせないと信じています。日印の人材交流の発展にはインドの教育制度の基本情報を理解する必要があり、インドの教育の諸事情をご紹介したいと思います。

インドの教育機関は Ministry of Human Resource Development（人材開発省）の管轄下にあり、小・中・高校教育と大学などの高等教育で分かれています。2019年時点での数字ですが、前者としては地方や都会を含め約１５５万以上の学校が登録されており、そこで約２.５億人の学生が勉強しています。一方、高等教育の場合は、５万３千ほどの大学・カレッジレベルの機関が登録されており、約３,５００万人の学生が勉強しています。

まず、インドの教育制度の基本をご理解頂きたいと思います。

1.　義務教育

日本の義務教育は中学３年ですが、インドも中学までです。都会やそれなりの大きな都市では比較的に義務教育を完成する子供が多くいます。一方、地方へ行くと諸事情により中卒で学校を止める子供もいます。**Compulsory Education** Act 2009（ 義務教育法 ）に併せて2009年に RTE法（Right to Education 、教育の権利）が国会で成立し、2010年から実施に移されました。法としては、６才から１４才の子供に義務教育　（中卒）の環境を提

供する内容ですが、都市と地方の環境の違いがあり、まだいくつかの州を除いて100%の義務化が成功したとは言えないです。インド政府は2005年から ASER (Annual Status of Education Report) を毎年発表しており、状況の可視化を目指し、把握するように努力しています。

2. 高等学校

多様性に溢れているインドの教育制度は少し複雑ですが、図１を見ていただければ少し理解しやすくなるかもしれません。

高等学校を加えますと日本で小学は６年、中学は３年、高校は３年ですが、インドは小学は４年、中学は６年、高校は２年が一般的です。基本教育年数は変わりませんが、小中高の年の配分が違います。インドの教育制度は、州政府が管轄するため、州によってカリキュラムなどが異なる場合があります。

高校は、試験制度により、上級高等学校と工業学校に進路が分かれます。この時点で、学生は科学・商学・文学の何れかを選定することになります。より良い高校に入学するためには、１５才のときには高得点を取らないといけない事情があり、勉強中心の生活になる学生は多いです。

私が小学生だった頃、小学１年でも落第するような厳しい環境でしたが、インド側でも少しゆとりがでてきました。中学３年まで、学校の試験はありますが、落第は無くなっています。しかし、中学４年からは競争が厳しくなる状況は変わりません。14 才前後の中学卒業、17 歳前後の高校卒業する学生の心の負担には大きな変更はありません。

最近は、スポーツなどでキャリアを目指す子供もいるので、勉強のみならず全体的な教育を視野に入れる制度に変わりつつあります。

上級高等学校を修了すると、上級高等試験により大学進学の道が開けます。この段階で、科学の学生は、医学、科学、エンジニアリングなど、さらなる専門性の枝分かれになります。ここにも少し複雑な要素があり、エンジニアリングと医学は世界共通として、４年と５年ですが、科学・商学・文学の学生は３年間で大学を卒業することになります。

図1：インドにおける教育制度　（一般モデル・マハラシュトラ州）

年齢	School/ University 学校・大学	Regular Stream（科学・商学・文学）		Engineering（技術）		Medicine（医学）	
25	University（大学）	Doctors Course（Ph.D.）博士	Science（科学），Commerce（商学），Arts（文学），Computer コンピュータ），Electronics（電子），Pharmacy（ファーマ），etc specialization（専門性）				
24		Doctors Course（Ph.D.）博士				Master in Medicine 2年	
23		Doctors Course（Ph.D.）博士		M.E, M.Tech	マスター 2年	Master in Medicine 1年	
22		Master（マスター・修士）	Science（科学），Commerce（商学），Arts（文学），Computer コンピュータ），Electronics（電子），Pharmacy（ファーマ），etc specialization（専門性）		マスター 1年	Medicine(Doctor) Bachelor 博士卒	
21		Master（マスター・修士）		Engineering（B.E., B.Tech）4年・卒業		Medicine	
20		Bachelor（T.Y 3年）		Engineering 3年		Medicine	
19		S.Y.（2年）		Engineering 2年		Medicine	
18		Degree Course F.Y インドオンバチュラーコース		Engineering 1年	Diploma in Engineering,（3年）	Medicine	
17	*Higher Secondary School H.S.C（高校）*	*12th Grade（高２）高卒*	*Science, Commerce, Arts, Computer, Electronics, Pharmacy, etc specialization（文商系・理系の専門性）*		Diploma in Engineering（2年）	*12th Grade（高２）高卒*	国家・州立試験
16		*11th Grade（高１）*			Diploma in Engineering（1年）	*11th Grade（高１）*	
15	Secondary School（中学校）	10th Grade 中学卒業					州立試験
14		9th Grade					
13		8th Grade（落第免除）					
12		7th Grade					
11		6th Grade					
10		5th Grade					
9	Junior School（小学校）	4th Grade 小学卒業					
8		3rd Grade					
7		2nd Grade					
6		1st Grade					
5	Primary School（幼稚園）	Sr KG					
4		Jr KG					
年齢							

※　Management（マネジメント）、Vocational　専門学校は省略しております。

修業年限は、科商文系の学士は基本的にカレッジで３年間（College）、大学（University）の 修士が 2 年間(Master’ｓ）となります。

科商文系の (M.Phil)博士課程準備コースが 2 年間、医学系の Doctor (博士)が 3～5 年の構成となります。州により少し違いはありますが、一般的にインドでこのような制度が見受けられます。

3. 大学

インドの大学(University)は、連邦政府が直轄する(Central university)中央大学（例：University of Delhi (デリー大)、University of Calcutta （コルコタ大)、University of Mumbai （ムンバイ大）など)と、州政府が管轄する（State University）州立大学をはじめとする大多数の高等教育機関に大別することができます。

１００年以上の歴史が誇る私大・自治大・公立大もありますが、日本で一般的に知られている インド工科大学(Indian Institutes of Technology 、IITs)はインド全国で２３箇所にあります。IIT は工学と科学技術を専門に学ぶ機関として設けられ、研究水準の高さや卒業生のレベルは国際的にも認められ、高評価をうけています。全ての IIT は人材開発省の管轄にあり、毎年インド政府の教育予算で運営している関係で私大と違って学生の教育費用は比較的に安いです。州に一つ設立の方針と伺ったとことがありますが、まだまだこれから建設する IIT もあると思います。日本の JICA の支援で IIT Hyderabad (インド工科大学ハイドラバード)が設立され、日印の若者が交流する一つの橋になっています。毎年留学で東大・慶応・早大などに留学する学生が増えています。一方、IT の大手や中小企業は、インターンや採用でインド工科大学ハイドラバードから採用する会社も年々増加しています。

しかし、まだ知られていない教育機関も数多くおり、そこにも高度人材がいるので、簡潔に紹介します。Indian Institutes of Information Technology (IIITs) インド情報技術大学は情報技術の分野で高度知識を得る学生用に設けられ、インド全国では23箇所あります。そのうち、5校は人材開発省管轄にあり、その他は PPP (Public-Private Partnership) 官民パートナーシップ事業として運営しています。

国立技術大学 National Institutes of Technology (NITs) はインド全国の 31 箇所にあります。インド科学教育研究大学 Indian Institute of Science Education and Research (IISERs) インド全国の 8 箇所にあります。

大学の種類	目的	大学数	学生の規模（入学可能学部卒エンジニアリング学生数）
IIT Indian Institutes of Technology	工学と科学技術を専門にする機関	23	12080 名
IIIT Indian Institutes of Information Technology（IIITs トリプル IT と呼ぶ）	インド情報技術大学は情報技術の分野で高度知識を得る学生用	23	3433 名
International Institute of Information Technology(IIIT, I square IT とも呼ぶ)	現地大学に付属するや自主性大の形式。コアエンジニアリングと呼ぶ分野を強化する為の大学	5	バンガロール IIIT はマスターコースのみ
NIT National Institutes of Technology	IIT に肩を並べて、インド中央政府と州政府の共同管轄	31	学部卒 19,000 名 大卒 8,050 名

4. 大学への入学方法

インド人材開発省（MHRD）はインド全国で一斉に行われる学部生用の試験があり、それは IIT JEE 試験(Joint Entrance Examination)という、NIT、IIIT、その他の中央資金技術機関（CFTI）、参加している州政府から資金提供を受けている機関、およびその他の機関の学部工学プログラムへの入学基準には、クラス 12 （イ

ンドの高２)/同等の資格試験およびJEEの成績が含まれます。JEE はJEE（メイン）の（BE / B.Tech.）用とIITを希望する学生にはJEE（上級）の適格性テストを受ける必要があります。毎年2500万人の学生が高校を卒業しますが、そのうち、約425万人の学生はエンジニアリングを希望します。2018年のデータですと110万人の学生はJEE メインを受験しました。そのうち、約26700名がNIT, IIITなどに入学しています。110万人のうち、22万４千人がJEE（上級）を受験し、12080名がIITに入学できる資格を勝ち取ります。このような、激しい入学試験を受け、入学できる率はJEE試験を希望する学生の率で言うと0.0109(1%未満)、しかし、エンジニアリングを希望する全学生と対象にして比較すると0.03%になります。米国のトップ大学に入学する受験より厳しい受験となります。

5. インドニュース(2020年１月)
News from India

１　内政

【連邦政府/連邦議会】
１月１５日：中央政府は，予算国会を１月３１日から４月３日まで開会すると発表した。
１月２６日：第７１回共和国記念日を祝うパレードが実施された。

【ＢＪＰ】
１月２０日：ナッダＢＪＰ総裁代行がシャーＢＪＰ総裁に代わり，第１１代ＢＪＰ総裁に就任した。

【デリー（ＤＬ）準州】
１月６日：選挙管理委員会は，ＤＬ準州議会選挙の投票を２月８日，開票を１１日に実施する旨発表した。

【ジャンム・カシミール（ＪＫ）準州】
１月９日：在印米大使，在印ノルウェー大使を含む１５名の外交団が２日間の日程でスリナガルを訪問し，地元の政治家，メディア関係者，草の根の指導者等と面会した。
１月１０日：最高裁は，連邦政府に対し，ＪＫ準州で敷かれている移動の制限等の基本的権利を制限する法令を直ちに見直すよう命じた。
１月１４日：ＪＫ準州政府は，カシミールにおける部分的なブロードバンドインターネットの再開及びジャンムの５地区における基本的な携帯電話通信の再開を発表した。
１月２４日：準州政府は，準州の全域的なインターネット（ブロードバンド通信及びデータ通信）の２５日の再開を指示した。ソーシャルメディアの利用制限は継続している。

【ジャワハルラール・ネルー大学（ＪＮＵ）における襲撃】
１月５日：ＪＮＵにおいて，覆面をかぶったグループが，主に左派系の学生及び教員を襲撃し，ゴーシュ・ジャワハルラール・ネルー大学学生組合（ＪＮＵＳＵ）代表を含む少なくとも２８名が負傷した。
１月６日:ＪＮＵの卒業生であるジャイシャンカル外務大臣は,「ＪＮＵにおける暴力を非難する。この出来事は,明らかに大学の伝統と文化に反している。」とツイートした。

２　経済

【インド経済（個人データ保護法案に関する報道ぶり）】
１月３０日：現地エコノミックタイムズ紙において，個人データ保護法案を起草したスリクリシュナ元最高裁判事の発言が報道されていたところ，概要は次のとおり。

ポイント
（１）スリクリシュナ元判事は，政府が草案に追加した政府自身に法の適用除外を認める条項については，最高裁においてプライバシー権に違反するかどうか審査され得ると述べた。同氏は，国会提出された法案は，プライバシーに関する最高裁判決に反しており違憲であり，政府に白紙委任を与えていると指摘している。
（２）同氏は，政府が国会に提出した法案は，草案に比べてデータ保護庁（Data Protection Authority）の独立性を弱めており，同庁が政府の「太鼓持ち」になる可能があるとしている。また，非個人データの規律のためには別の法律が必要であるにもかかわらず，政府は法案の中にそれをこっそり埋め込んでいると指摘している。
（３）同氏は，法案を審査するために国会に設置された上下両院合同委員会に対し，法案への懸念を記した意見書を提出したことを明らかにした。

３　外交

（印露関係）
１月１３日：印外務省は，モディ首相とプーチン大統領の電話会談について発表した。両首脳は，両国間の特別かつ特権的な戦略的パートナーシップに満足の意を示し，モディ首相は，５月にモスクワで開催される戦勝記念日７５周年への招待に謝意を表明した。

（印パキスタン関係）
１月１６日：印外務省報道官は，定例記者会見において，２０２０年後半にインド政府が上海協力機構（ＳＣＯ）サミット首脳会合を主催する予定であり，パキスタンの代表も招待する予定である旨述べた。

（印米関係）
１月２９日：現地メディアは，トランプ大統領の訪印が２月２４日から２６日で予定されている旨報じた。

（印ＥＵ関係）
１月２７日：現地メディアは，ＥＵ議会の議員により，ジャンム・カシミール（ＪＫ）及びＣＡＡに関する６つの決議案が提出された旨報じた。

（印豪関係）
１月２９日：現地メディアは，インド政府が２０２０年の日米印マラバール共同訓練に豪州を招待することを検討している旨報じた。

４　日印関係

１月２６日：印内務省は，民間人に授与されるインド国家勲章の一つであるパドマ・シュリー勲章を中村哲医師に授与する旨発表した。

今月の注目点：パドマ・シュリー勲章の受章（中村哲医師）
１．パドマ勲章は，毎年１月２６日の共和国記念日に授章者が発表され，芸術，社会福祉，公共活動，科学，エンジニアリング，産業貿易，医学，文学，教育，スポーツ及び公的職務等，幅広い分野において卓越した働きをした民間人に与えられる勲章で，上からパドマ・ヴィブーシャン，パドマ・ブーシャン及びパドマ・シュリーの３つがある。パドマ勲章より上で最高位のバーラト・ラトナは，不定期で極少数名にのみ授与される。
２．本年のパドマ勲章は，「パドマ・ヴィブーシャン」７名，「パドマ・ブーシャン」１６名（うち外国人２名），「パドマ・シュリー」１１８名（うち外国人１５名）の合計１４１名に授章される。授章者のうち３３名が女性，１８名が外国人／在外居住インド人／インド系外国人である。
３．近年の日本人の受章は，２０１４年の前田専学東京大学名誉教授、日印協会評議員（パドマ・シュリー），２０１５年の三角佐一郎日印協会顧問（パドマ・ブーシャン），２０１８年の溝上富夫大阪大学名誉教授、日印協会会員（パドマ・シュリー）による受章が挙げられる。

6. イベント紹介
Japan-India Events

◇ 最近のイベント ◇

◆ セミナー『世界が注目するインド高度人材獲得法　インドとのイノベーション創出に向けて』

日本貿易振興機構（JETRO）が主催する標記セミナー（2020 年 1 月 31 日）に参加した。

昨今、日本の人材不足を補うべく海外の労力を招き入れる傾向が強いと顕著に実感している。その中でも、IT、AI 分野等の理系に秀でる若きインド人頭脳労働者の日本への招聘について実態報告と共に、インド人エンジニアを送り出す側と受け入れる側の 2 面から報告が披露された。

元ソニー・インディア・ソフトウェア・センター社長、武鑓行雄氏をはじめ、IIT ハイデラバード准教授の片岡広太郎氏、日本のスタートアップ代表的企業である DG　TAKANO のサンスカール・ゴーダ氏が講演された。また、「日本企業のインド人採用の実態と生の声」のテーマで企業のトップと人事担当者によるパネルディスカッションが行われた。

インド人エンジニアは給料の高い欧米に就職し、多少崩れつつあるが日本の終身雇用型で横並びの会社環境を嫌う懸念があると思っていたが、これは必ずしも絶対ではなく、給与が高い方が望ましいがそれが全てではない。日本企業の仕事の任せ方が、今までの伝統的仕事に埋没させインド人の持つ自由な発想を阻害している。即ち、欧米で待遇するような年俸 1,000 万円や 2,000 万円が目標ではなく、インド人を奮い立たせる仕事の与え方が必要であり、給与は二の次だと唱える。また、インド人学生は日本企業の知識が少ないので、企業 PR が不可欠である。言葉や映像にて示すのではなく、企業へのインターンシップを通して、肌身に接して理解させることが必要である。そして企業側からインド人に対して明確に何をしてもらいたいのかを明示することが大切。

一般的日本人学生が描く、日本を代表する企業だから安定しており、給与も横並び的にそこそこ貰えるから良いのではないかとの判断基準で、その企業で何をするかまでは考えない（最近はそうでも無い様な気もするが）ことと比較すれば、大きな違いを感じる。やはり育った環境が成せる業（単一的民族と多様性の民族の違いか）なのかとも感じる。一度日本にて企業インターンをして就職したインド人学生は、日本に残ってくれる人が多くなってきている、とも主張されている。インド人には、Innovation の機会を与えることがいかに大切であるかを各氏とも、異口同音に強く主張していたことが印象的であった。　　（日印協会 常務理事　笹田勝義）

◇ 今後のイベント ◇

◆ 2 月 27 日（木）　インド タタ・グループ（タタ・サンズ）会長東大講演会

東京大学ではタタ・グループ（タタ・サンズ）会長 N.チャンドラセカラン（チャンドラ）氏をお招きして「デジタル革命～データが導く 21 世紀の繁栄に向けて～」と題する講演を東京カレッジ講演会の一環として開催します。

日時：2020 年 2 月 27 日(木)　16 時 30 分 会場　17 時 開演　18 時 30 分 閉会

場所：東京大学・安田講堂（本郷キャンパス）

言語：英語（日英同時通訳有）

申込方法:本イベントは事前登録制となります。以下サイトからお申込みください。

サイト内に詳しい内容もございます。https://www.tc.u-tokyo.ac.jp/

お問い合わせ：　　tcevent@graffiti97.co.jp

◆ 3 月 8 日（日）ME-BYO フェスタ 2020 春 最新テクノスポーツとインドパワーで未病改善！

神奈川県はインド政府との間でヨガとアーユルヴェーダを広めるための基本覚書を結んでいます。その神奈川県が 3 月 8 日「ME-BYO フェスタ」を開催します。ME-BYO は「未病」のことです。神奈川県は「未病改善」にチカラを入れています。3 月 8 日の ME-BYO フェスタは「インドパワー」にフォーカス！

アーユルヴェーダ、ヨガ、ボリウッドダンスなど、いろいろなイベントが予定されています。
日時：2020 年 3 月 8 日(日)　10 時から 16 時まで
場所：未病バレー「ビオトピア」（足柄上郡大井町山田 300）内
小田急線「新松田駅」下車、北口の富士急湘南バス 1 番線乗り場から「未病バレービオトピア」行きに乗車して約 10 分（230 円）、「未病バレービオトピア」バス停で下車してすぐ。臨時バスあり
※室内シューズをご持参の上、動きやすい服装でご来場ください。
詳しい内容は、神奈川県の HP をご覧ください。http://www.pref.kanagawa.jp/docs/y2w/evt/stage.html

7. 新刊書紹介
Books Review

§『現代におけるインド人社会の発展過程とインド人の海外進出』
著者：内藤雅雄　東京外国語大学名誉教授　出版社：東銀座出版社
価格：定価 3,545 円＋税　ISBN978-4-89469-211-4

第 1 部 抵抗するインド人
第 1 章 現代インド社会の変容　第 2 章 インド民族運動と国民会議派
第 3 章 第二次大戦期のインド民族運動と農民　第 4 章 ゴア解放運動史
第 5 章 マハーラーシュトラにおける不可触民解放の思想と運動
第 2 部 世界に羽ばたくインド人
第 1 章 インド洋世界に広がるインド系社会
第 2 章 東アフリカにおける「インド人問題」　第 3 章 インド系南アフリカ人の苦難
第 4 章 カリブ海世界における「東インド人」社会　第 5 章 インド人移民と宗教

著者が 40 数年にわたり研究活動を続ける過程で、所属した大学や研究所の機関誌や研究書に発表した論文､研究ノートをベースに加筆されたものである。

第一部では、植民下および独立後のインド人の大衆運動と、それを支えた思想の紹介と分析。

第二部では、「世界に広がる」と表現して、まさに世界各地に広がっていったインド人移民社会が、どのように形成されてきたかの歴史的過程と、各地に定着したあと、状況がどのように変化してきたか、などに焦点を当てた。独立後のインド、そして、世界へ羽ばたくインドの現在までを追った 500 ページを超える大作。

インドの歴史を振り返り、現在に至るまでの詳細な社会形態を記している。

B・G ティラク、ガンディー、ネルー達の活動をはじめ、複雑なカースト制度、反英独立運動、世界で活躍するインド人の紹介は本書のみどころ、特に東アフリカ、南アフリカのビジネスに関心のあるビジネスマンにも、インド人の広がりの歴史を学ぶことができる数少ない参考書にもなる。　（日印協会　事務局長　西本達生）

8. 掲示板
Notice

＜次回の『月刊インド』の発送日＞

次回４月号の発送は、2020 年４月 17 日(金)を予定しております。

チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。また、協会ではインド関係イベントを後援しております。月刊インドや協会ホームページ、Facebook でイベントをご紹介いたします。

＜編集後記＞

今月号では、今までも数々のメディアで取り上げられてきた、「リトルインディア西葛西の父」とも呼ばれ、今日全国で約四万人とも言われる日本でのインド人コミュニティを代表する顔となったチャンドラニさんにご自分の言葉で寄稿して頂きました。初めて来日したインド人たちの数々の生活の問題を解決し、インド人だけでなく、地域の日本人にも住みやすい街に発展させた彼。文章では淡々と表現されていますが、並大抵の苦労ではなかったはずです。話しやすい穏やかな人柄を表す風貌は、日印双方の人々から愛されていますが、見事に長く伸びた白いヒゲもご苦労の結果ではないかと推測されます。

記事に書かれていた「Y2k 問題」プロジェクトといえば、1997 年頃、編集子は、インドから派遣された技術者２人と３人で「Y2k 問題」を半年担当しました。インド人と働いたのはその時が初めて。彼らは真面目でいつもスーツでネクタイとインドサリー姿で勤務していました。今は理解出来る彼らの生活習慣ですが、言葉の壁、生活習慣の壁を越えて、少しでもサポートが出来ていたらと後悔するところです。きっと彼らはチャンドラニさんに助けられていたのでしょう。　　(編集子)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解･ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

入会随時受付中

日印協会は、1903 年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の３名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人･個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員･個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費:	個人	１口(8,000 円)から	☆入会金	個人 2,000 円
	学生	１口(4,000 円)から		学生 1,000 円
	一般法人会員	１口(100,000 円)から		法人 5,000 円
	特別法人会員	１口(150,000 円)から		(一般法人、特別法人会員共に)

月刊インド 2020年2月- 3月合併号 (2020年2月21日発行)　　発行人 平林 博　　編集人 西本達生
発行所　公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604　　Fax: 03-5640-1576　　E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: https://www.japan-india.com/